

屋久島における「新住民」の来住

田 島 康 弘

(2000年10月13日 受理)

New immigrants in Yaku Island, Kagoshima Prefecture

TAJIMA Yasuhiro

第1章 研究目的

1993年，世界遺産に指定されて以後，屋久島が注目されている。諸分野の研究が以前にも増して行われるようになってきた。入込客なども増加傾向だといわれる。

しかし，屋久島の人口は1960年以後，日本の多くの農山漁村と同様に毎年減少しつづけてきた。高度成長期の急減，低成長期の漸減ないし停滞も同様である。

こうした中で，奄美など県内における他の離島と比べ，島民のUターン現象や非島民の来住現象，とくにこの後者が目立つのが屋久島の特色のように感じられるのである。

いわゆるIターン者又は非島民の来住の増加である。

非島民の増加現象は県内では都市部以外では霧島地区などでも別荘地開発の進展とともに一定程度みられてはいるが，屋久島も同様の傾向なのであろうか。

本研究は以上のような関心の下に屋久島における非島民（以下，新住民と呼ぶことにする）の来住の実態について一定の調査に基づいて報告しようとするものである。

調査対象としては上屋久町と屋久町のそれぞれで，新住民が最も多いとされる集落を1つずつ選定し，面接による聞き取り調査を行った。

上屋久町では一湊集落内の白川地区¹⁾の16世帯を，屋久町では平内集落内の新住民が集中する19班15世帯と20班18世帯，計33世帯を調査対象とした。

2000年7月中旬に，それぞれの地区を訪問し調査を行った。調査には筆者の他に6名の学生が参加した。

第2章 屋久島における人口動向

屋久島における「新住民」の動向をみる前に屋久島の人口動向について基本的なことを捉えておきたい。その内容としてここでは、

- ① 屋久島全体の人口の増減
- ② 屋久島における転出、転入の動向
- ③ 集落別に見た人口動向
- ④ 1990年代の集落別人口動向

などを中心にみていくことにする。

第1節 屋久島の人口の増減(図2-1)

図2-1にみられるように屋久島の人口は1930年代の部分的な停滞期はあるものの戦前は増加し続け、戦後も1960年まで増加傾向が続いた。しかし、いわゆる日本経済の高度成長期に、日本の他の農山漁村部と同様に急激な人口流出がみられ、1970年代以降の低成長期を迎えても減少傾向は継続し、今日に至っていると言えよう。絶対数でみても、ピーク時の両町を合計した2万4千人から1万3千人台へと半減に近い状況となっている。高度成長期における過疎化の波をもろに受けた地域の1つとすることができよう。

第2節 転出、転入の動向(図2-2, 図2-3)

上述の「過疎化」の内容は転出、転入の数値によりさらに明瞭になる。また、近年のいわゆる「新住民」の動向が官庁統計による転入の数値にどのように、また、どの程度反映しているかについても検討したい。

図2-2は上屋久町、図2-3は屋久町の数値を示している。両町とも60年代前年から1973年頃まで大幅な転出超過であり、大量の人口流出があったことがわかる。

またその後も1990年頃までは転出の方が転入よりも上回っていることが示されている。ただ1990年代に入って転入の方が転出を上回る年も出てきており、この傾向は屋久町の場合においてより顕著であり、転入者がかなり増えてきていることをうかがわせる。

このことは本研究のテーマ「新住民の来住」に沿った傾向を示すものと言えよう。

さらに、近年の動向については1990年代における両町の人口の推移を示した図2-4をみると、より一層はつきりする。

両町とも90年代においては、部分的な人口の増加傾向がみられ、とくに屋久町においては'92年以降、人口が増加に転じた様子すら伺える。

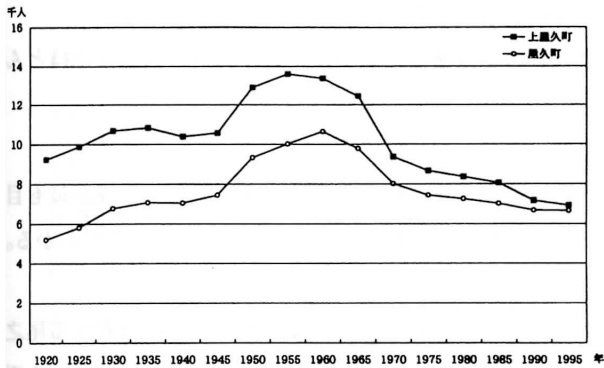


図2-1 屋久島の人口の推移

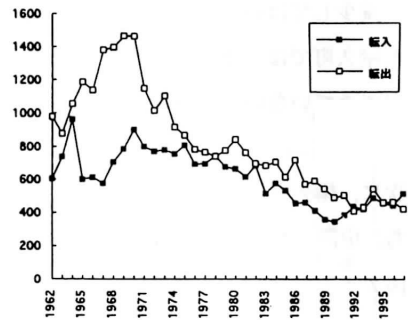


図2-2 上屋久町の転入・転出の推移

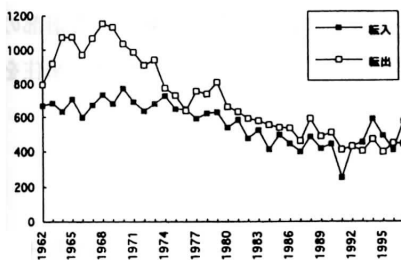


図2-3 屋久町の転入・転出の推移

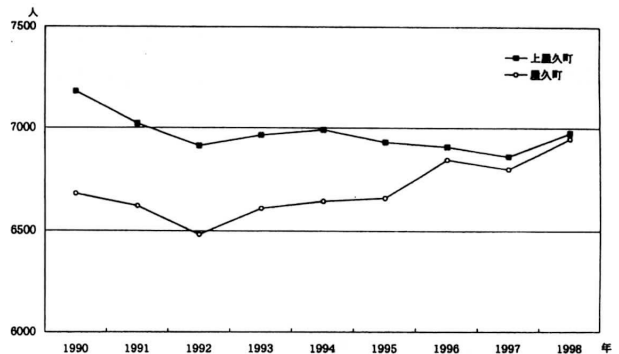


図2-4 屋久島の人口の推移（1990年代）

第3節 集落別にみた人口動向

人口動向をさらに集落別に詳しくみよう。

「新住民」の来住は世帯数の増加としてもあらわれるので、世帯数についてもあわせてみておきたい。また、役場等からの聞き取りにより、新住民が多いとされ、従って我々が調査集落としてとりあげた上屋久町の一湊、屋久町の平内の両集落について、とくに注目してこれらの変化をみよう。

1) 上屋久町

1950年から1995年までの上屋久町の集落別人口の推移をみると口永良部、一湊、永田、小杉谷²⁾の人口減少が著しいことがわかる。とくに、かつては2800名以上の人が住み宮之浦をも超える集落であった一湊は1960年代にその人口が急減し、'70年代以降も減り続けていて、'95年には1000名程度となってしまった。（図2-5）

これに対して世帯数をみると、口永良部を除いて各集落とも人口ほどの減少傾向はみられず、宮之浦などは逆に増加傾向を示している。一湊についても1955年の約600世帯から1995年の約470世帯

へと減少してはいるが、3分の1に減少した人口程の減り方ではない。(図2-6)

上屋久町では一湊は新住民の来住が多いと言われる集落ではあるが、官庁統計の数値にはほとんど出てきていないと言えよう。

2) 屋久町

次に、屋久町の1950年から1995年までの人口の変化を集落別にみると、まず栗生の激減が最も目立ち、中間、湯泊などの減少も著しい。すなわち屋久町内の西部地区で減少が著しいことがわかる。(図2-7)

こうした中で、近年人口が増加傾向の集落もいくつか存在する。すなわち、役場の存在する尾之間とこれに隣接する小島及び平内そして安房に隣接する松峰などである。新住民が多いとされる平内はこの中に入っており、新住民の来住が一定程度人口統計に反映していると言えそうである。

他方、世帯数をみると全集落的に近年の増加傾向がみられ、とくに尾之間、松峰で顕著であり、この他、平内、原、平野、麦生、小島、高平などが目立つ(図2-8)。一般に南東部から南部の各集落で世帯数の増加がみられている。調査対象集落の平内もここに入っており、新住民の来住を一定程度反映していると見られよう。

第4節 最近10年間の集落別人口

ここでは、上屋久町では一湊、屋久町では平内という調査対象集落に注目しながら、1990年代の人口の動きについて見よう。

先に、1990年代における両町の人口の推移を見た。上屋久町では全体として人口の減少傾向が見られるものの時には人口が増加する年もあり、90年代全体としては減少ないし停滞の傾向であるのに対し、屋久町では92年を最低に、以後はほぼ毎年増加傾向にあることを見た。以上の動きを集落別にみるとどうなるであろうか。

1) 上屋久町の場合

上屋久町の90年代における集落別人口を見ると、宮之浦が92年以降増加傾向である以外は、ほとんどの集落で減少ないし停滞の状況にあることがわかる(図2-9)。とりわけ、調査対象集落である一湊は、新住民が来住している集落であるにも関わらず、上屋久町の集落の中では人口減少が最も目立つ集落のようである。このことは新住民が入ったにしても、その数が少ないか、又は転入者を上回る転出者が存在することを意味することになろう。実際の聞き取りの中では、この双方ともあてはまるように感じられた。

以上は人口で見たものであるが、世帯数で見ても基本的な傾向は変わらない(図2-10)。ただ、宮之浦の世帯数ははっきりした増加傾向にあること、楠川も同様の増加傾向が見られることなどが多少違っている。一湊について言えば人口と同様、世帯数もゆるやかな減少傾向にあると言えよう。

2) 屋久町の場合

屋久町の場合は上屋久町と多少異なっている。まず、人口でみると、90年代に増えた集落は尾之

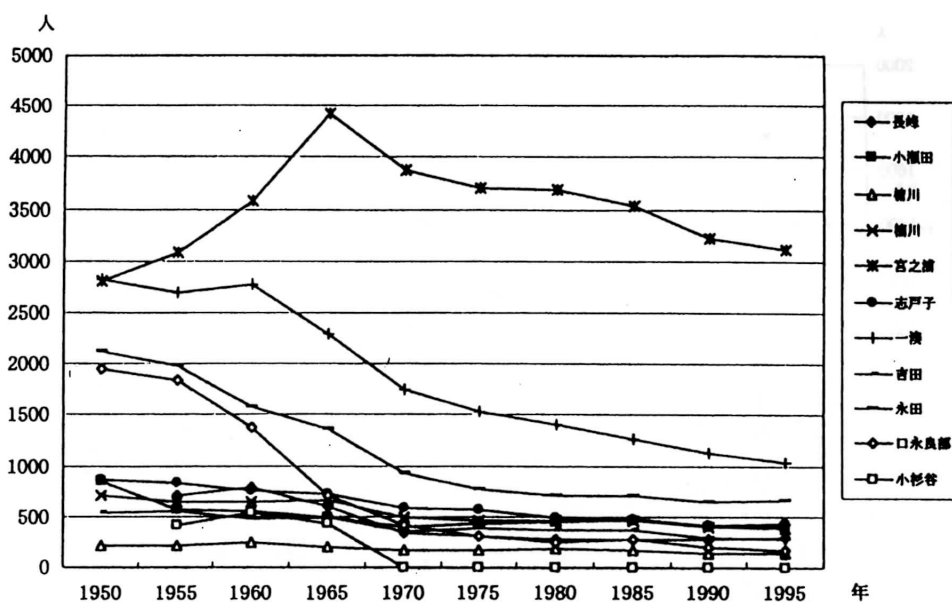


図2-5 上屋久町集落別人口の推移

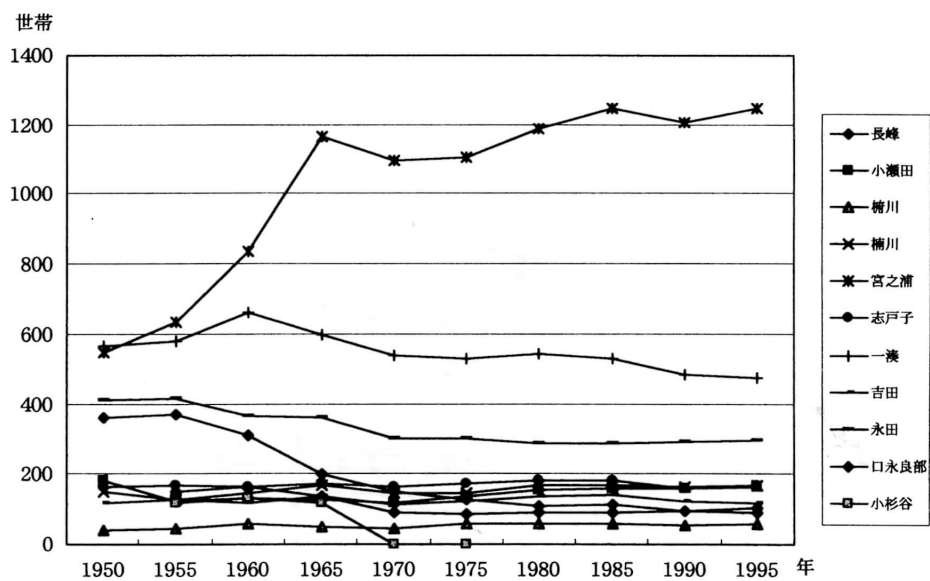


図2-6 上屋久町集落別世帯数の推移

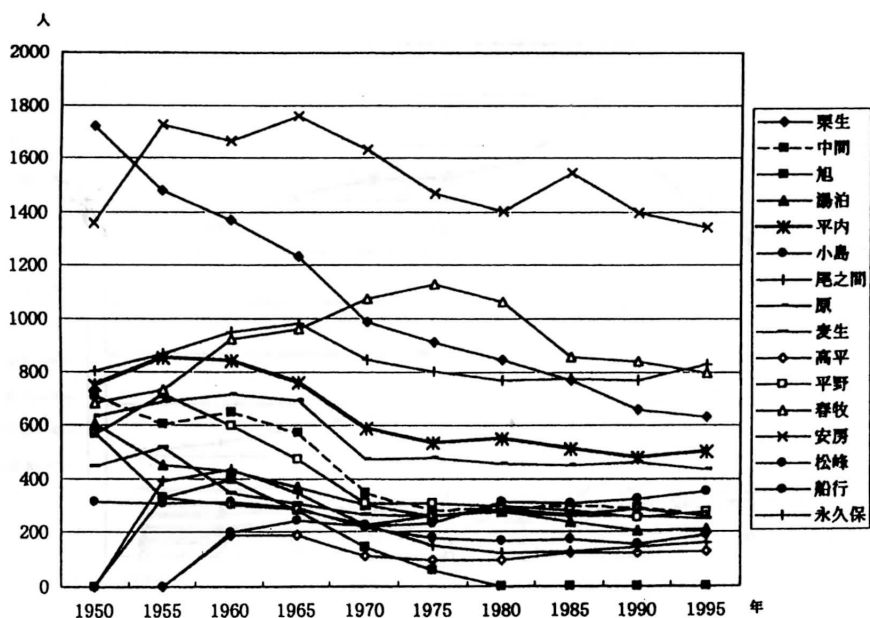


図2-7 屋久町集落別人口の推移

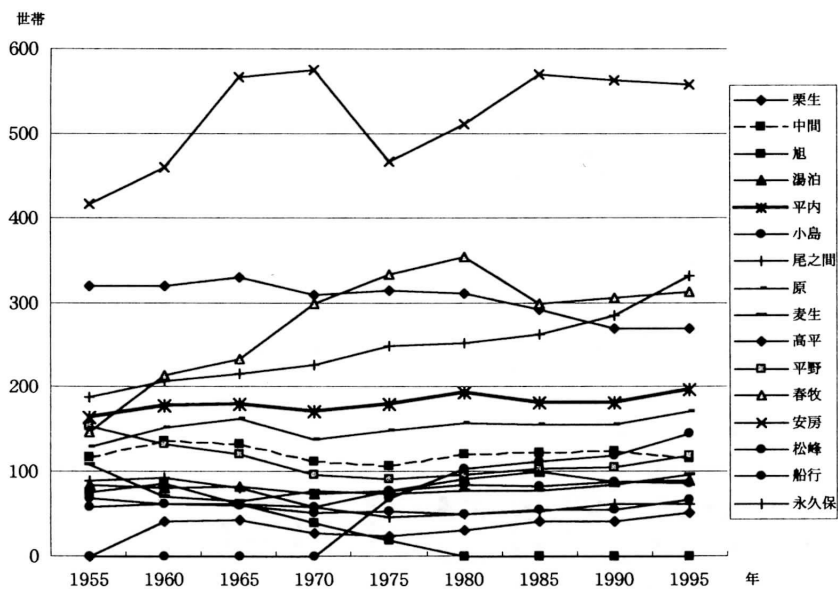


図2-8 屋久町集落別世帯数の推移

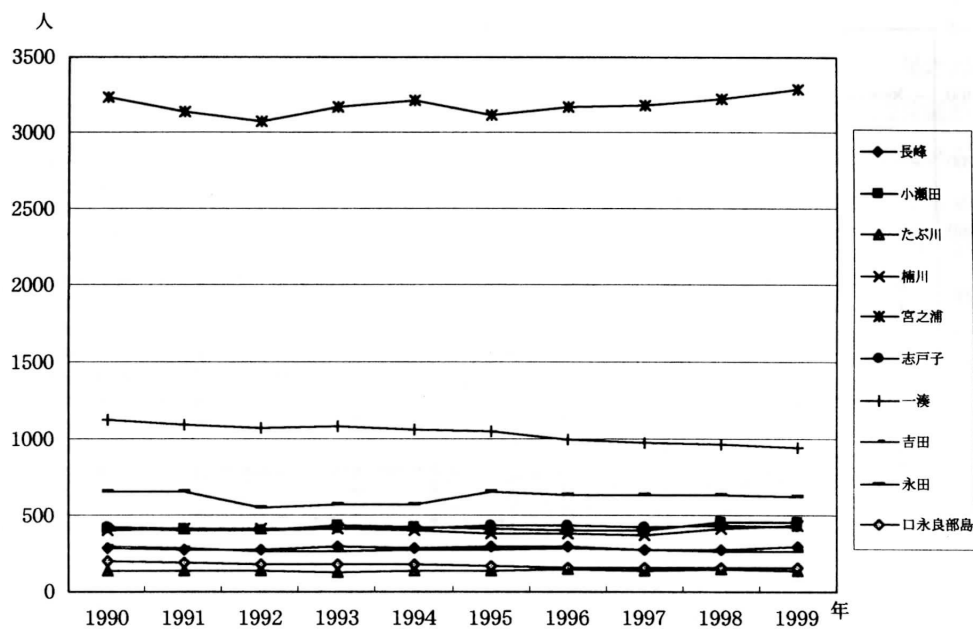


図2-9 上屋久町 90年代集落別人口

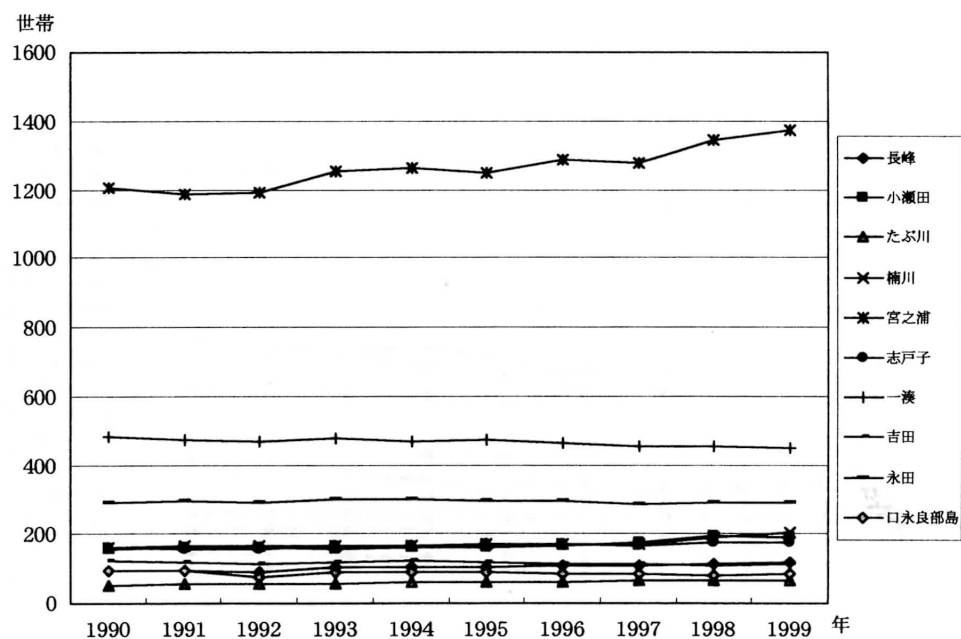


図2-10 上屋久町 90年代集落別世帯数

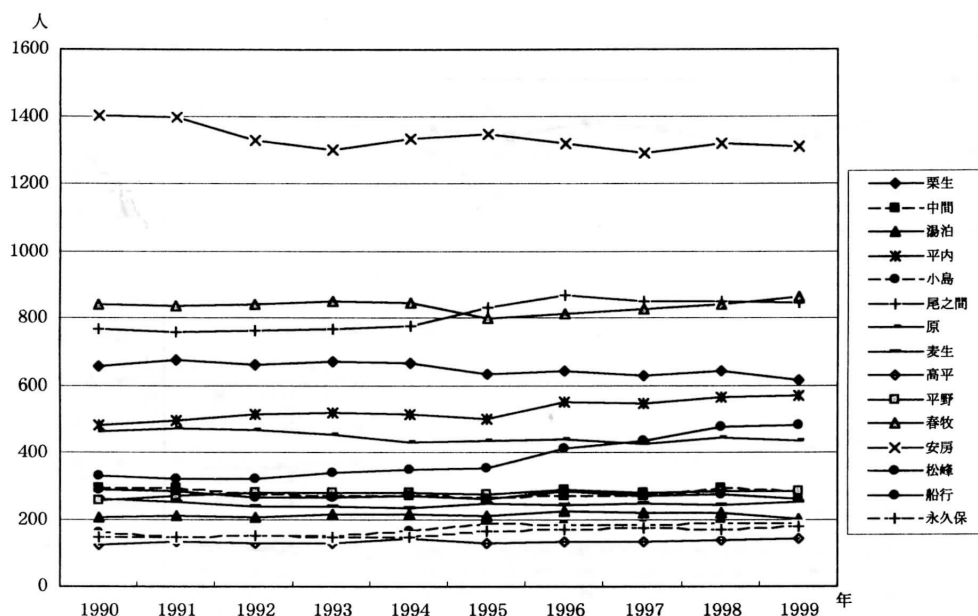


図2-11 屋久町90年代集落別人口

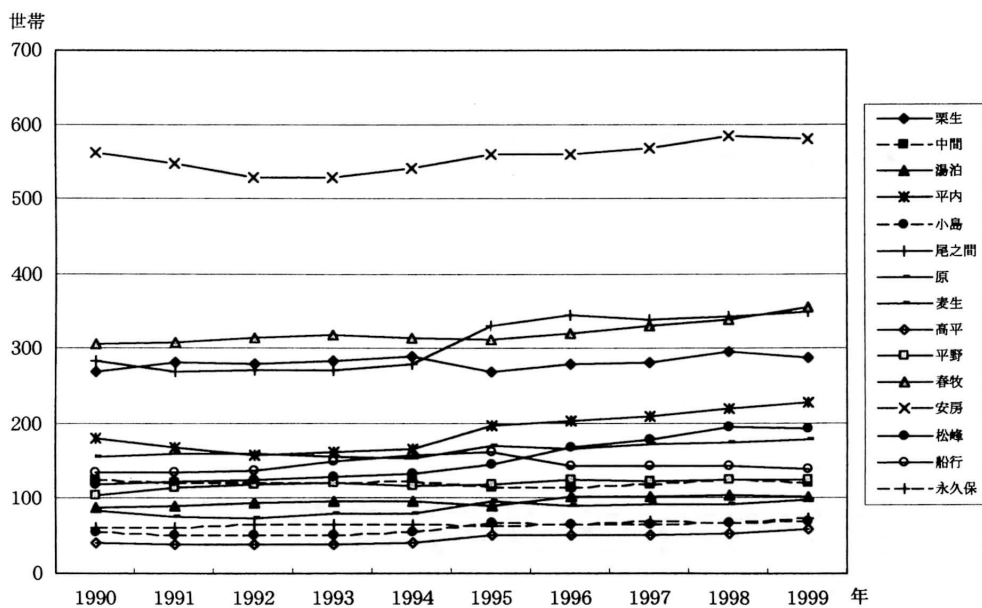


図2-12 屋久町90年代集落別世帯数

間、平内、松峰などであり、屋久町最大の中心集落である安房はむしろ減少している。(図2-11)

以上のことは上屋久町の宮之浦、楠川など中心部が増えているのとは対照的である。尾之間の人口増加は役場所在地であることの影響が、また、松峰の場合は中心集落安房の郊外的な位置が原因として考えられるかも知れないが、平内の場合は新住民の増大が人口増加の主要原因であると言え、ここに新住民の来住の統計への反映がみられると言ってよいであろう。世帯数でみても基本的には同様の傾向と言えるが、尾之間、平内、松峰の他に、安房の郊外部に位置する春牧の世帯数の増加も目立っている。(図2-12)

以上のことから屋久町の場合は最大集落である安房の郊外³⁾、役場所在地の尾之間、そして平内で人口が増えていることがわかった。

第5節 屋久町が行った調査について

近年の新住民の来住の増加を反映してか屋久町は独自に人口動向に関するアンケート調査を行っている。

これは「転入に関するアンケート調査」と題するものであり、平成11(1999)年度(1999年4月1日から2000年3月31日まで)の転入者を対象として行ったもので、転入者数432人、アンケートの回答者数177件で回収率は41.0%である。

以下結果についての概略を示そう。

まず転入の動機をみると転勤が70件で4割、移住が70件で4割、その他が37件で2割となっていて移住目的で転入した者が4割あり、かなり多いといえよう。

次に移住者70件のうち単身移住者が33件(47%)、家族移住が30件(43%)、未回答が7件(10%)であって、家族での移住もかなりあるが単身での移住も多い。これは、はじめは1人で来て、ある程度住むための条件ができてから家族を呼ぶということかも知れない。筆者のききとりによればこうしたケースが少なくなかった。

次に、仕事の状況について「決まっている」が32件(46%)、「決まっていない」が30件(43%)、未回答8件(11%)で、決まっていない者がかなりいるが、この中には定年後の来住者も含まれている。

さらに移住の動機では自然環境17件(24%)、就職等9件(13%)、身内と同居7件(10%)、老後のため4件(6%)、その他12件(17%)、未回答21件(30%)となり、あげられた動機のなかでは自然環境の良さが最も多くなっている。

最後に「以前、屋久町に住んだことがあるか」の答をみると177件中「はい」が59件(33%)、「いいえ」が115件(65%)、未回答が3件(2%)で、住んだことのない者が多いが、移住者70件の中でのこの内訳は不明である。

移住者70件にはUターン者とIターン者との双方を含みその比率はわからない。しかし回答者総

数177件のうちでは屋久町出身者が45件 (25%) 非出身者124件 (70%), 未回答8件 (5%) であった。

そこで、この比率を移住者に当てはめるといわゆる I ターン者は $70 \times 0.7 = 49$ 名, U ターン者が $70 \times 0.25 = 17.5$ 名となって、かなりの I ターン者がいることになる。

第3章 新住民の実態

本章では、上屋久町、屋久町の両町において「新住民」が最も多く居住する集落を選択し、面接調査を通して「新住民」のより具体的な実態を捕らえることに努めた。

我々は両町役場での聞き取りにより上屋久町では一湊集落、屋久町では平内集落をそれぞれ「新住民」の最も多く居住する集落として選択した。第2章第4節で扱った1990年代における人口動向の統計的考察では新住民の増大傾向は、一湊集落の場合はあらわれていなかったが、平内集落の場合はある程度あらわれていた。屋久島全体としても両町を比べると北の上屋久町よりは南の屋久町の方で「新住民」の来住が多い傾向にあることは既にみた通りである。

第1節 上屋久町、一湊集落

1 一湊集落の概観

まず区長高橋蓮雄氏からの聞き取りを中心にして現在の一湊集落を概観しておこう。一湊集落が最も多いときは650世帯もいたが、現在の世帯数は約450世帯、人口は1000人であるという。従って、集落内には人の住んでいない家 (空家) が70~80軒もあるという。高卒者の90~95%は島外に出てゆき、その行先は関東もいるが関西が多い。集落内では高齢化が進み、1000人のうち70才以上が280人もいる。

一湊は風が強いところなので、親だけをこちらに残すのが心配で、親を都会の自分のところへ転出させようとする子もおり、そうした家では共同墓地の墓石を横に倒している。他方、Uターンする者もある程度存在し、彼らは元の自分の家の他、集落内の新設された3カ所の団地に住む者が比較的多いという。この3つの団地とは1) 町営の岡団地 (6世帯)、2) 大浦団地 (6世帯)、3) 西団地 (5世帯) の3つである。

一湊の人々の働き場所としては、以前からの漁業およびサバ節加工の他は、とくにUターン者の仕事としては、新しくできた徳州会病院の看護婦や近くにある碎石工場の生コンの運転手がある程度で、転業の機会は少ない。

次に一湊集落でIターン者が集中している白川地区について述べよう。ここは、以前は地元の人が居住していた小集落であったが、人口の流出の中で廃村となり、そこへ新住民が入り込んだ地区である。現在の世帯数は新住民が16世帯、地元の人1世帯、合計17世帯である。ここに住む新住民

の人々は一湊集落の人達とだけでなく、口永良部島とか、トカラ列島の人などの外部の人々ともよく連絡をとりあっているという。

2 白川地区の調査結果

白川地区の新住民は16世帯である。白川地区での調査は平日の昼間に行われたため、留守宅も多かったので、職場のある宮之浦地区でも被調査者を訪ねて聞き取り調査を行った。その結果8世帯から聞き取り調査を行うことができた。以下に結果の要約を示そう。

1) 来住年

来住年については聞き取りにより8世帯の調査世帯だけでなく16世帯すべての結果を知ることができた。これによると、80年代の後半を中心に新住民が白川地区に入った。(表3-1-1)

2) 前住地

前住地では、関東が圧倒的に多く、関東の中では東京が最大であった。(表3-1-2)

3) 来住形態(来住時の人数)

来住形態では個人と家族とが半々であることがわかったが、この個人の中にははじめ一人で来て、しばらくしてから家族を呼び寄せたケースが多いことも予想される。また、現在も独身の者もいる。(表3-1-3)

表3-1-1 来住年

来住年	調査結果	聞き取り
1975～1979	1	2
80～ 84	1	3
85～ 89	3	6
90～ 94	3	3
95～ 99		2
計	8	16

注) 直接調査できなかった残りの8世帯については
被調査者からの間接的な聞き取りにより明らかとなった

表3-1-2 前住地

前住地	世帯数
東京都	3
神奈川県	2
埼玉県	1
福井県	1
鹿児島県	1 ^注

注 鹿児島県の1は与論町である

表3-1-3 来住形態(来住時の人数)

来住形態	世帯数
一人	4
夫婦	0
家族	4
計	8

表3-1-4 来住時の世帯主の年齢

年齢	来住時の年齢	現在の年齢
25～29	2	
30～34	1	1
35～39	3	1
40～44	2	1
45～49	1	1
50～54		2
55～59		
60～64		2
計	8	8

表3-1-5 以前の職業

職 業	世帯数
勤務	1
自営 野菜販売	1
飲食店経営	1
看板屋	1
建築家	1
ミュージシャン	1
漁師	1
無職	1
計	8

表3-1-6 現在の職業

職 業	世帯数
建築業	2
食堂経営	1
食堂店員	1
文筆業	1
登山案内等	1
楽器製造	1
僧侶	1
計	8

4) 来住年の世帯主の年齢

30代 が4例, 40代 が3例, 20代 が2例 であって全体として若いときに入っていることがわかる。(表3-1-4)

5) 来住前と現在の職業

来住前の職業では「勤め」よりは自営的なものが多く、その中味は多様であった。現在の職業の方も建築業と店員以外は自営的と言えようが、やはり多様であることは変わらないと言えよう。(表3-1-5) (表3-1-6)

6) 来住理由

最後に来住の理由をみると、「Y氏からの誘い」が最も多くなっており、Y氏の影響力が強いことを伺わせる。次いで、自然環境に惹かれたという理由が多くなっていると言えよう。(表3-1-7)

表3-1-7 来住の理由

理 由	世帯数
Y氏からの誘い	3
海山のある所で暮らす	1
自然の水が飲める	1
静かな環境	1
旅行で来て気に入った	1
白川山の子供たちとの出会い	1
計	8

3 来住者の事例 事例1 K. T. 氏

1985年、埼玉県の入間市から家族でここに入った。当時4人の子供がおり、一番上が小学校に入るときで、子供の教育的な環境を考えたことも移住の一要因。仕事は絵かきなので、絵の製作が出来る場所であることも条件の一つだった。入間市には芸術の学校があったことは好条件だったが、家は住宅街の中ではあったが、国道16号線に近く、夜もうるさかったし、又狭くなっていた。そうした時、たまたまS. Y氏から土地があるから住まないかと誘われ、氏の記事を読んで移住を決めたのであって、あちこちを探したわけではない。決めたあと見に来なさいと言われて来てみたら原野であったが、この何カ所かを見てまわって今のところに決めた。ただ、始めは家がなかったもので、1年間で家を建てる約束をして、白川にあった公民館を借りて生活した。家は棟上げまでは大

工さんに頼んだが、あとは自分でやった。

絵が描けること、子供の教育の他に、農業にも興味があり、来て1年経ってから一湊の町で八百屋を始め、2年間ぐらい続けた。また、島で野菜の自給ができないものかと、無農薬の野菜作りに取り組み、一湊の人達も土地を提供してくれたりして協力してくれたが、始めて3年目頃から、トラックで安い値段で売り歩く「走る野菜屋さん」が登場し、育児に手のかかる「子供も放り放して」がなばったが、やはり太刀打ちできなかった。また、近年では、畑を作ってもシカやサルがやってくるし、その被害はひどくなっている。永田で田も借りて米づくりもやってみたこともあるが、これはうまくいかなかった。思うようにいかないこともいろいろあったが、今はここに暮らすこと自体は気にいっている。また、環境文化村構想について尋ねたところ、「屋久島方式」でやることが目玉であったのに、行政主導で行われている。すでにシナリオができている部分が多く、地元の共感が得られないまま建物が2つできただけで、ソフトの部分、下から積み上げていくようなコツコツしたところがない。要するに地元の人の意見が吸い上げられていない。以上のような考えを述べられた。

事例2 S. Y. 氏

氏は1977年からここに住み始めた。それ以前は東京の杉並や五日市で無農薬の野菜販売の仕事をしていた。海が好きだったので「海のみえるところで暮らしたい」と思って与論に行き1年間暮らしたことがあるが、そうしたら「海を見るのがいやになってしまった」。結局、山のない島には長くは暮らせないことがわかって、山のある島で暮らそうと思い、中学校の地理で習った屋久島に来た。最初に屋久島に来たとき、中間の開拓地で縄文杉のことを始めて聞いた。その頃は「樹齢8000年で丸一日歩かないと行けないところにある」ということだった。山に登って、縄文杉を見にいったとき、縄文杉から次のようなメッセージを聞いた。「あなたはここに住めば一生よく（幸福に）暮らせる」というものだった。その後、屋久島に住むために努力したが、いい土地がなかなか見つからなかった。2年間が過ぎたあと、「屋久島を守る会」のH氏から「白川山を使ってもいい」という連絡が来た。移住の前に一度下見に来て島を一周したが、北半分では永田以外はさびれていて中でも一湊が一番さびれた集落のように感じ、必ずしもベストとは思わなかったが、土地が提供されたので、それを使わせてもらうという形で入った。「守る会」が所有する15町歩を全部使ってもいいということだったので新しい村を作りたいと思った。現在屋久町では新島民と在来の人との摩擦が絶えないが、白川山の場合は「在来の文化を学んでいくことを第1番にあげている」ので一湊の人達には比較的スムーズに受け入れてもらっていると考えている。もちろん「どうしても・・・」⁴⁾の部分もなくはないが。氏によれば島民のよいところは「島民の間では相互扶助が徹底していること」で、これはいわば共同体が持っている長所である。反対によくないところは「長いものにはまかれろ」式の封建的な部分や「議をいうな」で封じ込んでしまうようなところであるという。この人達は皆「自然に属しながら人間の営みを永く続けていくという点を共通に

持っている」と最後に付け加えられた。なお、「最近は家庭菜園などもサルやシカの被害からかやらない者が多くなってきた」というが、氏の畑は「シカだけは入れない」ように網を張り巡らせていた。

事例3 A. Y. 氏

1986年来住。それまでは横須賀で飲食店を経営していた。兄が白川山におり、移住する前にたまたま遊びに来たとき、ここが気に入った。そこで、移住の準備に2～3年かけたあと、はじめに自分一人で来て、後に妻と3人の子をつれて来て、家族での生活を始めた。家は大工さんに頼んで半年かかった。物置などは自分で作った。現在、宮之浦でレストランを経営しているが、来た直後は特に決まった職はなく、畑などを楽しみにやっていた。始めはいくらかの作物がとれたが、畑も狭かったし、サルやシカその他キジも多くてダメだった。移住後3年ほどたってから、今のレストランを始めた。これも始めは地元の人を客の対象として考えていたが、今では観光客の方が多くなった。現在、レストランでは氏と奥さんの他、白川山のS氏の奥さん(11年目)、K氏(2年目)、T氏の娘さん(パート)など、白川山の人々が働いている。氏によれば、現在白川山では一湊の人が「よそもの」の中には入りたがらないためか、地元の人との交流やつきあいがほとんどなく、白川山が認知されていないような感じがあるが、店の方には地元の人がたくさん来てくれるので、住民として認められていると感じているという。

第2節 屋久町、平内集落

1 平内集落の概観

まず、区長西橋豊啓氏からの聞き取りを中心に平内集落の近況を捉えておこう。

1992(H. 4)年の平内の世帯数は160戸であったが、2000(H. 12)年の現時点の世帯数は240世帯であり、この8年間に80世帯も増加した。このうちUターン者は10世帯程で、残りの70世帯はIターン者すなわち新住民である⁵⁾。この中には現在家を建設中の者も含んでいる。

平内集落内でここ数年の間に、たくさんの新住民が住むことになった背景には、屋久島パイン社が大きく関わっている。この会社は1960年代後半に屋久島で農地を購入し、パイナップル他の生産を試みたが成功せず畑のみ残り、近年の屋久島ブームの中でその畑を宅地造成に切り替え、販売するようになったのである。その面積は平内だけでも30町歩(ha)ほどあり、この間、年に10戸程度新住民が増えてきた。平内区としては、平内の村作りを「Iターン者といかに仲良く村作りをしていくか」ということで取り組んでいる状態である。新住民の中には、定年で退職し老後を過ごすために来た者もいれば、いわゆる脱サラで自然が好きなのでここに来て仕事を探す者もいる。もっとも仕事先が多くあるわけではなく、岩崎ホテルや農業管理センター⁶⁾を通しての仕事があるくらいである。

また、今年から区としてパソコンを購入し、区のホームページを開き、

- ① 民宿やユースホステルの紹介
- ② ポンカン通信販売やオーナー制の案内・募集
- ③ 独身男性の花嫁募集

などを行っている。これには区内の12名の者が関わっているが、そのうちの11人は新住民であり、新住民の力が発揮されている。また、区内にある民宿、ユースホステル8軒のうち5軒が新住民による経営であり、この分野でも新住民が活躍している。さらに、区の評議員8名の中に1名の新住民が入ることになった。今、屋久島パイン社は更なる造成地づくりに努めているので、今後ますます新住民が増える可能性がある。一方、今日でさえ、初期に来た人達は「こんなに住宅が増えるなら都会と変わらない、こんなはずではなかった。できれば今の土地を売って他へ移りたい」と考える者すらでてきている。

新住民との間で意見の合わない問題も生じている。その一つは電気代の徴収の仕方の問題で、区の徴収手数料として料金より1円高く徴収し、それを区の収入に入れていたことをめぐってである。もう一つはスーパー林道⁷⁾の問題である。これは南西部4集落の区長連名で県に陳情書が提出され、1991年に決定、92年に工事が着工されたあと、新住民によりスーパー林道反対運動が起こった問題である⁸⁾。対立の内容については「生命の島」に譲り、こうした対立の問題も新住民来住以後の実態の一部であることをここでは確認しておきたい。

2 調査結果について

1999年10月1日現在の平内集落の世帯数は228世帯であり、2000年7月調査時点での世帯数は区長によれば240世帯である。1年もたたないうちに10世帯以上増えたことになる。この240世帯のうち新住民は70世帯であるが、その中で我々は新住民が最も多く集中している19班15世帯と20班18世帯合計33世帯を調査対象世帯とした。実際の調査では4つの組に分かれ、分担して調査に当たった。その結果、不在者もあり、19班で8世帯、20班で13世帯、合わせて21世帯から回答を得ることができた。以下に、その結果を示す。

1) 来住年

全員が90年代に来ており、90年代の前半と後半に分けてみてもほぼ同数で、とくに集中した時期があるとは言えない。(表3-2-1)

2) 前住地

前住地では上屋久町の場合と同じく関東が最も多いが、次いで近畿もかなりおり、全体としては大都市圏の居住者であると言えよう。(表3-2-2)

3) 来住形態をみると夫婦というケースが過半数であり、夫婦プラス子供を加えると大部分となる。すなわち単独よりも家族とくに夫婦二人で来る形態が多いことがわかった。(表3-2-3)

4) 来住時の年齢

これは60代前半が最も多く、次いで50代、さらに40代と続く。以上から定年後の者、または、比較的中高年者が来島していることが示されている。(表3-2-4)

表3-2-1 来住年

来住年	世帯数
1991	2
1992	4
1993	1
1994	1
1995	2
1996	2
1997	4
1998	2
1999	2
2000	1
計	21

表3-2-2 前住地

前住地	世帯数
関東	12
中部	2 ^{注1)}
近畿	6
中・四国	1 ^{注2)}
計	21

注1) 名古屋と富山

注2) 岡山

表3-2-3 来住形態(来住時の人数)

来住形態	世帯数
一人	3
夫婦	11
夫婦+子供	5
その他	2
計	21

注) その他は2例とも本人と親である

表3-2-4 来住時の年齢

年齢	世帯数
35~39	2
40~44	2
45~49	3
50~54	2
55~59	4
60~64	8
計	21

5) 現在の年齢

現在の年齢は60代以上で約半数を占め、50代を加えると大部分となる。やはり、中高年者が多くなっている。(表3-2-5)

6) 以前の職業

勤務すなわち勤め人(サラリーマン)が大多数であり、自営業者は少ない。これは上屋久町の場合とは対照的であると言えよう。(表3-2-6)

7) 現在の職業

現在は勤め人は少なく、最も多いのは無職である。自営的なものが多少あり、その中では民宿経営が多い。(表3-2-7)

8) 来住の理由

来住の理由は様々であるが、まとめると屋久島の自然に惹かれたという理由が70～80%を占めており、これが最大であると言えよう。(表3-2-8)

表3-2-5 現在の年齢

年齢	世帯数
35～39	1
40～44	1
45～49	1
50～54	2
55～59	6
60～64	6
65～69	3
70～74	1
計	21

表3-2-6 以前の職業

職業	世帯数
勤務(サラリーマン)	15
自営 商店経営	2
職人	1
建築	2
不明	1
計	21

表3-2-7 現在の職業

職業	世帯数
勤務	2
自営	5
無職	13
小計	20
不明	1
計	21

注) 自営5の内訳は民宿等が3、
建築1、農業1である

表3-2-8 来住の理由

理由	世帯数
旅行で来て気に入った	5
海、山、水、釣りの魅力	4
南の暖かい所に住みたかった	4
自給自足的田舎暮らしを求めて	2
世界遺産で有名だったので	1
旅行に来て分譲地を買ってしまったので	1
親戚がいたので	2
定年後の第2の仕事求めて	1
土地の人の対応が良かったので	1
計	21

3 来住者の事例

事例1 N. F. 氏

氏は1997年、千葉県松戸市から来島した。それまでは音楽関係の会社に勤めており、定年を迎え、そのあとブラブラしているのが嫌でもう1回働ける場を求めている。たまたま宮之浦岳に登山に来たとき泊まる場所がなく、とくに若い人が山から下りてきたままの姿でも泊まれるようなところが必要だと感じ、ユースホステルの経営をしようと決めた。始めは自分一人に来て大工さんを頼んで住まい作りをし、これができた半年後に奥さんと呼び寄せて、現在二人でユースホステルを運営している。現在の年齢は60代前半である。

事例2 K. N. 氏

氏は1992年から屋久島に住み着いている。それ以前は神奈川県横浜市で船会社に勤め、船長などをしていた。ここに住むことになったきっかけは、1989年たまたま旅行で屋久島に来て屋久島パイ

ン社のホテルに泊まった際、不動産分譲の話聞きすぐに土地を買ったことである。衝動買い的だったかも知れないと氏は言う。翌年は定年が予定されている年で、横浜に持っていたマンションの4階に住んでいたが、昇り下りも「しんどかった」こともあり、これを売って平内に家を建てたが、会社からあと2年いてくれと言われたのもう2年間勤めてこちらに来た。すなわち、定年後、定住のためにこちらに来たのである。こちらに来たのは自分一人だけで、今も一人の生活である。平内集落のホームページを作った中心人物の一人で、子供を対象にしたパソコン教室などもやったことがあるという。

事例3 K. M. 氏

氏は1992年、千葉県野田市からこちらに来た。こちらに来る前の仕事は外資系の貿易会社に勤めていたが、以前から農業をし、ある程度自給自足の生活をすることを望んでいた。そんなとき「田舎暮らし」の本で屋久島パイン社の土地分譲の広告を見て、はっきりした予定もなく1987年頃この土地を買った。その後子供が大学に行かないと言い出したので予定より早くここに来ることになった。こちらに来たのは夫婦二人であり、来たときは40代後半であった。来た当初は畑を借りて作物を作っていたが、今は畑は返し自分の庭で野菜を作る程度である。特に決まった仕事は今はいないが、農業管理センターに登録しており、ポンカンやタンカンの収穫期に農家から依頼があったときには仕事に出ている。奥さんもハイビスカスなどを使った草木染めをしており、その製品が麦生に建てられた「ぼん・たん館」で売られている。

第4章 まとめ

- 1 久しく人口減少が続けてきた屋久島で、1990年代に統計上も人口減少から増加の傾向がみられ、また、実際にも外からの移住者の来住が目立ってきている。この新住民に注目し両町でその最も顕著な集落や地区を選んでその実態を調査し考察した。
- 2 両町の新住民のタイプは異なっていた。上屋久町一湊の白川地区のケースをまとめると、早い人は70年代後半から、多くのものは80年代後半に主として関東から来住したものが多く、30代を中心とする若い人々が主体で、勤め人であった者は少なく、都会生活を離れ新しい生活を求めて来島した人が多い。これに対し、屋久町平内集落の方は全員が1990年以降に来島し、関東からだけでなく関西からの人もおり、多くの人が定年後または中高年齢で夫婦二人か家族全員で来住している。以前の職業も勤め人が多く、こちらでは決まった仕事をしていないものが多い。一度旅行などで屋久島に来て、その自然の魅力に惹かれて移住するに至ったケースが少なくない。
- 3 言わば前者のケースが若い人の都会では実現できない新しい生活を求めての移住であったのに対し、後者は定年を迎えて第二の人生を自然豊かな南の島で過ごすことを願って移住したケース

と言うことができよう。後者の人々は屋久島での生活について次のような長所と問題点を指摘している。すなわち、長所としては空気がきれいで水がおいしく、離島なので夏涼しく冬暖かいこと、さらに人間関係がゆっくりしていることなどである。問題点として多くの人があげていることはガソリンを始めとした物価が高いことであるが、その他医療などが必ずしも十分でないこと、文化的・経済的に豊かでないこと、遊ぶところがないことなどである。

- 4 こうした新住民の来住は地元の社会に当然様々な影響を与えており、「新住民といかに仲良くして村づくりをしていくか」という課題を村に課すに至っている。両者の価値観に違いがあるのはむしろ当然であり、双方がそのことを感じている。ところで、地元の村との関係で新住民には3つの異なったタイプがあるとの指摘がなされている⁹⁾。第1は地元や村に入り込み溶け込んでしまう人であり、第2は村に入り込みたいと思っはいるが実際にはなかなか溶け込めない人、第3は村に対して関心を示さず全く溶け込まない人の3つである。第1のタイプの人が多くなれば問題も少なくなるであろうが、実際には第2のタイプの人が多いであろう。互いの考えに違いがあることを認めた上で話しあい（互いの考えの言い合い）を積み重ねていくしかないのかも知れない。その際、かつて「生命の島」誌上で行われた公開の討論¹⁰⁾などは一つの有効な方法であると思われる。屋久島は自然と人間との共生が行われてきた島であると言われるが、異なる考えを持つ個々人の間の共生についても、その実現に向けて努力をし続けてほしいものである。

注

- 1) 地図（地形図）では白川と書かれているが、地元の人たちは白川山（シラコヤマ）と呼んでいる。
- 2) 小杉谷は1970年には廃村となった。
- 3) 郊外というより周辺というべきかも知れない。
- 4) 意見があわないというようなことであろう。
- 5) ただし、70世帯の中の2世帯は区費を支払わず奉仕作業にも出てこないで、区から抜けてもらっているという。
- 6) ジャガイモ、ボンカン、タンカンの収穫の際にここに登録しておく人と求人がくる。臨時的な仕事である。
- 7) 「南部林道」の問題である。
- 8) 「生命の島」34巻（1995）に関連記事がある。
- 9) K. N. 氏による指摘である。
- 10) 「生命の島」34巻（1995）の特集「南部林道」。

謝 辞

本稿作成にあたり、上屋久町環境政策課の有馬照幸氏、屋久町町民生活課の日高氏や企画調整課の方々には資料の収集、調査の便宜等でたいへんお世話になった。また、一湊区長の高橋蓮雄氏、平内区長の西橋豊啓氏には外からの移住者に対する情報を始め我々の調査に対し熱心な協力をしていただいた。また、屋久島産業文化研究所の日吉眞夫氏にも移住者に関する情報をいただいた。そして何よりも一湊白川の山尾氏、手塚氏や平内の山田氏を始めとした多くの被調査者の方々には彼ら自身の体験に基づいた貴重な話を伺うことができた。以上の方々に厚く御礼申し上げます。